

# MUSEUM EYES

ミュージアム・アイズ

Vol. 82

特集

商品部門リニューアル

NEWS / 展示 zoom in! / 研究最前線 / 収蔵室から / M2カタログ



# 特集

## 常設展 商品部門リニューアル

この4月でアカデミーコモンに博物館が開館し20年となります。また、2年後には前回の展示替えから10年経つことから、3ヶ年度をかけて2度目の常設展リニューアルを実施することになりました。ここではその初年度に刷新された商品部門の展示を紹介します。新しい展示では、伝統的工芸品が主要な収集・展示資料となるまでの経緯を紹介し、その時々社会・経済・文化の動向に裏付けられた工芸品収集の意義を読み解いてゆきます。

### 日本の伝統工芸

ノスタルジーからクールジャパンへ

最初にイントロダクションとして、これまでの歴史の中で生み出されてきた工芸の美をそのまま映した製品と、社会情勢の変化に適応しつつ現代的な商品としてアレンジされた品々を対比して紹介しています。伝統工芸は産業と言うにはあまりに小規模となっていました。高品質なモノづくり、文化的成熟を表象するアイコンとして地域のブランドイメージ構築に活用する動向も出てきています。高齢者をターゲットとする懐古的なイメージではなく、スタイリッシュで高品質なイメージを前面に若年層へ訴求するという、伝統的工芸品産業における戦略転換の状況を提示しています。



奥) 加賀友禅 花嫁のれん  
前) 箱根奇木細工 手許たんす



商品陳列館のあった2号館は建物の向かって右翼部分  
写真提供：大学史資料センター

### 1 戦後の経済復興

商品研究所資料室の設立

商品部門のルーツをたどると、商学部教員による研究グループの資料室設置（1951年）にさかのぼります。当初は戦後復興期における化学繊維や合成樹脂など新素材への注目、再開された対外貿易に係わる資料収集から始まりました。1957年に常設の展示施設として商品陳列館を開館、高度経済成長期の始まったこの頃、地方の手工業製品を活発に収集するようになりました。



ビロン製学童服



国産初の化学繊維ビロンの  
撚糸と綿

### 3 時代の転換期

伝統工芸再評価の視点

大学紛争の混乱による閉鎖の後、商品陳列館の運営は1973年に再開。その際、伝統的手工業製品（伝統的工芸品）を収集・展示する方針が採用されます。ポスト高度経済成長の混乱期において、商学部教員はなぜ伝統工芸に着目したのでしょうか？1974年には当時の通商産業省が「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」を制定するなど、国全体として伝統工芸が再評価される動向がありました。



世界的な評価を受ける  
熊野化粧筆



津軽塗 菓子鉢



フェノール樹脂製汁椀

### 2 高度経済成長期の光と影

手工業製品の衰退と存続

地方物産品収集がおこなわれていた1960年代、天然素材を用いた手工業製品は、工程の機械化や化学合成技術の導入による代替素材・代替品の登場により、日常用品からは姿を消してゆきます。一方、製法上の制約から工程の転換が進まなかった工芸品についても、国民経済の向上を背景に美術的付加価値をともなう高級商品として受容されてゆく動向がありました。



国指定伝統的工芸品の  
第1次指定品  
南部鉄器



商品陳列館再興の象徴  
尾張七宝《葵》硯箱

### 4 “現代”を映す伝統工芸

伝統的工芸品産業の研究

アカデミーコモン新博物館が2004年に開館し、教育研究体制も一新されました。近年では高い品質によって世界的な評価を受けたり、SDGsの「⑫つくる責任 つかう責任」「⑮陸の豊かさを守ろう」に象徴されるように、地球環境への負荷を低減し持続可能な消費形態を実現する上で、多品種少量・高付加価値という商品開発を宿命付けられていた伝統工芸に対する再評価の機運が高まりを見せるようになりました。



山中漆器の  
木目を生かした  
椀と日用椀



出西窯モーニングカップ

NEWS 03

## 2023年度 明治大学博物館・南山大学人類学博物館交流事業 交換展示でギャラリートークを開催しました

明治大学博物館会場



南山大学人類学博物館会場



両館の協定事業の一環として、10月17日から11月25日に、明治大学博物館の資料を出展した「花押・印章——内藤家文書を中心に——」展（南山大学人類学博物館会場）と、南山大学人類学博物館の資料を出展した「オセアニアの民族造形——故今泉隆平氏のコレクションから——」展（明治大学博物館会場）を開催しました。これに合わせ、11月15日に明治大学博物館の日比佳代子学芸員が、11月24日に南山大学黒澤浩教授が、それぞれの展示会場におもむき、学生・一般社会人にもむけてギャラリートークを行いました。展示制作担当者の詳しい解説に、身を乗り出して聞き入る参加者の姿もあり、たくさんの質問も出てギャラリートークは大いに盛り上がりました。

NEWS 01

## 公開特別講義 伝統的工芸品の経営とマーケティング Vol.15 信楽焼発「世界観」の創造を目指した商品開発 公開特別講義を開催しました



商品部門が商学部の先生方と共同で実施している信楽焼（滋賀県）調査の成果報告会が、去る12月20日、4年ぶりに実現し、学生・一般合わせて166名の参加を得ました。滋賀県工業技術総合センター信楽窯業技術試験場の高畑宏亮氏（陶磁器デザイン係主任専門員）をお招きし、産地が抱える課題とその対応策について先生方を交えディスカッションをおこないました。卸売商社を経由する従来型の流通機構が弱体化し、長らく卸売商社に商品開発を委ねてきた窯元は、独自の商品開発力が必要となりました。窯元の当主らは独自のブランドと世界観を確立してアピールする狙いからTEEBAN商品開発研究会を組織、県内や東京への出張展示会を通して開発力を磨いています。

NEWS 04

## 『明治大学デジタルアーカイブ』を公開しました



デジタル  
アーカイブは  
こちらから



2023年10月、教育研究の発展及び社会貢献活動の充実に資することを目的として、『明治大学デジタルアーカイブ』を公開しました。同サイトでは、博物館、図書館及び大学史資料センターが所蔵する資料のうち、合計2500件（画像数：約6万8000点）を公開しています。公開している資料画像は、一部を除き、ダウンロードや二次利用が可能です。各機関の利用条件やライセンス表示を確認の上、ご利用ください。

NEWS 02

## 広島大学総合博物館との 大学博物館間交流を行いました



両館のキャラクターを手にする  
千葉館長(左)と中坪館長(右)

2023年12月、広島大学総合博物館から、中坪孝之館長（統合生命科学研究所教授）他2名が来館しました。千葉修身館長（商学部教授）らが迎え、一行を展示施設や収蔵スペースに案内、その後、大学博物館による学生への教育活動や博物館運営への学生の参画などについて活発な議論を交わしました。明治大学博物館と広島大学総合博物館では、大学博物館間及び学生スタッフ間での交流を更に推進し、社会に求められる大学博物館の方向性を検討・実現していきます。



両館の教員・職員・  
学生スタッフでの集合写真

# 東国の古墳文化の実像を求めて

— 大塚初重と明大考古学 —

忽那 敬三（考古部門学芸員）

（会期：2023年5月27日～8月7日・終了）

明治大学考古学博物館の初代館長を務めた故大塚初重名譽教授は、太平洋戦争から復員した後、発掘によって歴史を明らかにする考古学の存在を知って衝撃を受け、静岡県登呂遺跡の発掘調査への参加を皮切りに、1950年に創設された考古学専攻と歩みを共にする形で日本各地の遺跡の発掘調査とその研究に携わった。特に東日本の古墳文化を研究の中心に据えてその実像の解明に邁進するなど、まさに戦後の考古学界を牽引した一人であったのである。



1. 最終講義での大塚氏(1997年)。本展会場では最終講義の録画ダイジェスト版を上映し、オンラインでフルバージョンを公開した

明治大学では多くの学生を教育し、卒業生は考古学をはじめとした様々な分野で活躍している。その一方で、当館の前身である明治大学考古学博物館館長時代には他に先駆けて生涯学習講座の開設に取り組み、「考古学の語り部」としてその普及に尽力したのである。本展では、大塚氏が手がけた発掘調査による数々の出土品・調査記録やその関連資料から、大塚氏と明治大学の古墳研究、そして考古学の普及への情熱と足跡を振り返った。

## 考古学との出会いと古墳文化の探求

1926(大正15)年に東京で生まれた大塚氏は、海軍時代に経験した生死の境をさまよう壮絶な体験から当時の歴史教育に疑問を抱くことになった。その際に感じた真実の歴史を学び教えたいという強い思いが、大塚氏を考古学研究へ突き動かした大きな要因であった。

終戦・復員ののち入学した明治大学で、後藤守一氏の講義に感銘を受けて考古学を一生の道と定めたのである。「日本考古学界の巨人」とも称された杉原庄介氏にも指導を受けながら、登呂遺跡をはじめ群馬県岩宿遺跡や神奈川県夏島貝塚(どちらも出土品は国指

研究「1963年」)。こうしたなかで転機となったのが茨城県虎塚古墳の調査(1973年)である。未盗掘の横穴式石室から鮮やかな彩色壁画が発見され、大きな話題となった。前年に発見された奈良県高松塚古墳の壁画が非公開であったことから、虎塚古墳では遺跡の重要性を周知し、文化財保護への理解を得るため積極的に市民に公開する姿勢を貫いたのである。発見からわずか一週間後に開催された見学会には12000名が訪れ、さらに保存兼見学施設が建設され発見から50年を経た今も毎年春と秋に定期公開が行われている。

1980年代からは生涯学習教育に重点を置き、1983年に明治大学考古学博物館長となつてからは一般向け講座・遺跡見学会・概説書の刊行など、考古学の普及に一層注力していった。1997年の明治大学退職後もその活動はますます広がりを見せ、明治大学の生涯学習講座だけでも263回、遺跡見学会は90



2. 会場全体の様子。中心に虎塚古墳石室模型を設置した



3. 展示の様子。当館が所蔵する大塚氏関わった発掘調査資料や大塚氏による調査図面を展示した



4. 名刺や定期券(右)、復員時の携行品目録(中)、卒業論文の草稿(左)(大塚家蔵)



5. 一般向け講座の当日資料や著書の数々。考古学の普及に尽力した



6. 室内照明を落としたワークショップ時の虎塚古墳石室模型。玄門部はワークショップ用に別途パネルで制作した

## 虎塚古墳石室模型とワークショップ

会場中央に展示したのは、大塚氏の転機ともなった虎塚古墳壁画の実物大模型(長さ3.3m、幅2.5m)である。展開して配置することで、現地の壁画やレプリカ(ひたちなか市埋蔵文化財センターで展示されている)では、数メートルの距離を隔てるを得ない奥壁や手前部分の文様も間近で観察が可能とした。また、模型の一部を分割・可動式とし、箱型の石室状に組み換え、天井石をプリントした幕を上部に架けて実際の石室を疑似体験するワークショップを開催し

定重要文化財)など、明治大学の考古学専攻黎明期における日本考古学史上に残る著名な遺跡の発掘の数々に参加したのである。古墳時代を自らの研究の中心に据えたのは1947年の千葉県能満寺古墳の調査がきっかけであった。さらに馬形飾付金銅製冠が出土した茨城県三味塚古墳、東日本で初めて埴輪製作拠点を発見した茨城県馬渡埴輪製作遺跡、特殊な埋葬施設と多彩な大型埴輪群が出土した茨城県玉里舟塚古墳、約500基からなる東日本最大級の群集墳である長野県大室古墳群など重要な古墳の発掘に取り組んだ。生涯で調査した遺跡は47年間で26都府県の97か所にのぼり、古墳だけでも51か所という驚異的な発掘調査をもとに研究を推進したのである。これらの調査資料は、現在でも明治大学博物館の主要コレクションの一角を占めている。

この膨大な調査と資料を基礎として、古墳の石棺の研究(卒業論文「箱形石棺の研究」1951年、修士論文「舟形石棺の研究」1954年)を進めたほか、茨城県丸山古墳・勅使塚古墳などの調査に基づいて全国の前方後方墳の研究を行い、こうした古墳が各地の古墳群の初期に築造される盟主的な性格をもつという特性を明らかにした(博士論文「前方後方墳のた。展示見学の妨げとならないよう閉館後に実施し、室内の照明を落として実際の石室に近い雰囲気を実現した。模型内は狭いため1名ずつ交代で入るようにした。模型内は狭いため1名ずつ交代で入るようにしたが、中には寝転がって被葬者の気分を味わう参加者もあり、一般の見学者は入ることができない虎塚古墳の石室を実感することができたと概ね好評であった。当初は4回(うち1回は小学生対象)の実施予定であったが、予約がすぐに定員に達したため、2回追加開催し、計69名が参加した。また、ギャラリートーク(4回実施)は延べ93名の参加があった。

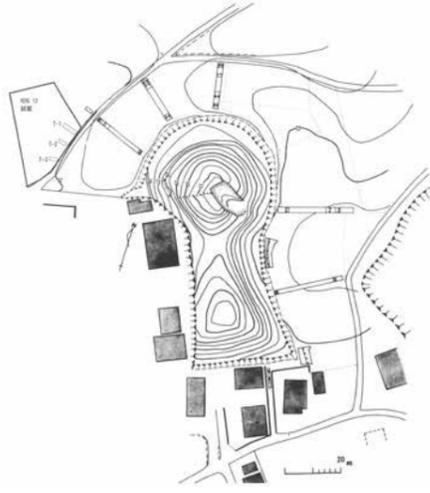
本展は61日間の会期中、当館単独主催の展覧会としては過去最多の8525名の入場者を得た。会期中に大塚初重氏を偲ぶ会など大型のイベントが開催された影響もあるが、大塚氏と本学考古学専攻の調査研究の歩みと業績を多くの人々に知っていただく機会とすることができたといえよう。

# 線刻絵画をもつ埴輪

——茨城県府中愛宕山古墳の資料から—— 忽那敬三（考古部門学芸員）

## 1 府中愛宕山古墳出土の線刻絵画をもつ埴輪

霞ヶ浦へと流れる恋瀬川の北東に位置する、茨城県石岡市北根本に築かれた府中愛宕山古墳は、全長96mの前方後円墳である(1)。この古墳は東日本で第2位の大きさとなる全長187mの舟塚山古墳の北300mにあり、他の13基とともに舟塚山古墳群舟塚山支群を形成する。支群中の古墳の多くが25m以下の小規模墳で占められるなかで、消滅した平足塚古墳(前方後円墳、90m級か)とともに舟塚山古墳に次ぐ規模である。古墳を霞ヶ浦に出入りする舟に見立て、舟塚山古墳は入舟と呼ばれるのに対し、本墳は出舟と称されていることから、古くから両古墳は相対する存在として認識されていたようである。1897(明治30)年、東京帝国大学教授の坪井正五郎により発掘調査が行われたが、「壺7個」が出土したのみで埋葬施設は確認されなかったという。墳丘周辺の開発が進んだことから1971年に県史跡に指定され、墳丘本体の大部分が残されたこととなった。その後、1979年に舟塚山古墳群の整備を視野に入れた発掘調査が石岡市教育委員会によって実施され、埴輪片が多数出土した(諸星ほか編1980)。古墳の形状などから築造は5世紀の後葉(末頃)と推定されている(谷仲2020ほか)。



1. 府中愛宕山古墳の墳丘平面図(谷仲編2016より転載)

象埴輪片が見られるものの大多数が円筒埴輪片であり、一部須恵質のものが混在する。黒斑をもつ個体が見られないことから、甕窯<sup>かま</sup>導入後と見てよいだろう。人物・動物埴輪と明確に判断できる埴輪片が見られないため、これらを持つ近隣の行方市三味塚古墳、小美玉市玉里権現山古墳、かすみがうら市富士見塚1号墳よりも先行するとみられるが、富士見塚1号墳でも確認されている櫛状工具で波状文を描く円筒埴輪片が数点存在することから、工人間の交流があった可能性が指摘されている。さて、これまで知られていた府中愛宕山古墳の埴輪の文様はこの波状文のみであったが、この調査時の府中愛宕山

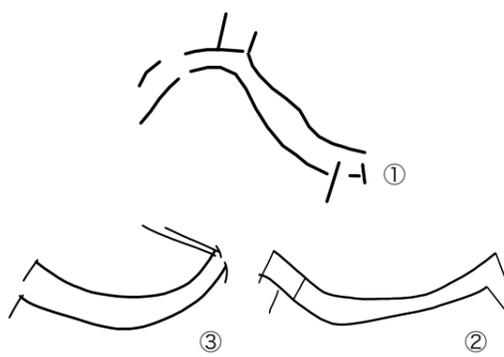


2. 府中愛宕山古墳の線刻絵画をもつ埴輪(石岡市教育委員会提供)

古墳出土埴輪の中に動物らしき線刻をもつ資料1点が確認された(2)。縦4cm、横4.4cmの小片で、器壁が薄いこと、また表面にはハケメがなく器壁が若干丸みを帯びることから朝顔形埴輪の肩部などである可能性もある。線の断面は半円形であり、ヘラではなく棒状の工具を用いて最大幅2mmの太めの線で描かれる。破片の右下方から左上にかけて平行線で主要部を描き、一度水平方向に屈曲したのち緩やかに斜め下方へ伸ばしている。主要部が首、屈曲部が頭とすると屈曲部の上側の線から出ている2本の線は角のようにも見える。斜め下方に伸ばした部分は上から重なった別工具の不規則な線で乱れており、意図的な描線

が見えていない可能性もある。破片の右端は欠損が多く判断としないが、主要部の下の線から斜め下方へ2本の沈線が出ており、左側の線が首と頭とすれば、右端は前脚と胴の接続部にあたる(3)①。

残存状況が良好でないため明確ではないが、線の様相から図形文様とは考えにくく、絵画であるかみてよいのではない。動物線刻を持つ埴輪を集成した小泉玲子氏によれば、40遺跡中34遺跡は鹿(狩りのシーンを含む)であるという(小泉2013)。鳥の場合は2本足、馬の場合は馬の背に乗る人物の表現でそれと推定できるが、本例の場合には前脚・長い首・頭部の角状の表現から鹿である蓋然性が高いと考えられる。では、このような埴輪の線刻絵画の存在からどのようなことが読み取れるのであろうか。



3. 埴輪の線刻絵画例(縮尺不同)  
①府中愛宕山古墳(写真からトレース)  
②富士見塚1号墳(国士館大学編2006を再トレース)  
③大極殿古墳(山中編1986を再トレース)

## 2 埴輪の動物絵画

埴輪の線刻絵画については春成秀爾氏の論考があり、近畿を中心とした西日本に集中的に見られることが明らかにされている(春成1999)。小泉氏の動物線刻の集成でも、やはり近畿、特に京都府・大阪府に半数が集中し5世紀代に多く、そのほとんどが鹿である点を指摘している(小泉前掲)。これは、馬形が多数を占める動物埴輪とは明らかに異なる傾向である。関東地方の動物線刻例は栃木県・群馬県・埼玉県(計3遺跡6例)(伝資料1を含む)のみであり、少ないことがわかる。近年、埼玉県埼玉1号山古墳で鹿と長胴の動物らしき絵画が描かれた円筒埴輪が確認されているが(ナツヒ編2023)、依然として関東地方では極めて稀な存在である状況は変わっていない。つまり、本例は茨城県内のみならず関東地方においても数少ない動物絵画の可能性があるとと言えるのである。ここで、関連する資料を取り上げたい。先述した富士見塚1号墳は府中愛宕山古墳の南東10kmに位置するが、こちらの円筒埴輪でも線刻絵画が確認されている(国士館

大学編2006、3②)。円筒埴輪0226の最上段外側へへで描かれた線刻は、下向きの複線、弧線で構成される。2本とも右端を下向きに屈曲させる一方、左端は上側の弧線のみ下方に曲げ、端よりやや内側に下方へ向く線を別個に2本描く。一見、動物とは認識し難いが、複線の弧線で胴体を、屈曲で頭部を表現し明瞭に角をもつ京都府大極殿古墳の鹿の例と類似する(山中編1986、3③)。単線で構成されるものの、同様の表現は大阪府長原15号墳にもみられる。同じく複線の弧線で描かれる画題に船があるが、船の場合は大阪府新池遺跡例のように弧線の内側に帆柱を表す縦線を描いている。かなり図案が崩れているものの、富士見塚1号墳例も鹿とみてよいのではない。

## 3 埴輪の絵画が示唆するもの

時期が近い富士見塚1号墳にも線刻絵画が存在するのであれば、府中愛宕山古墳例は偶発的な例と片づけるべきではないだろう。埴輪に鹿を描く意味については紙幅が限られているためここでは触れないが、ではこうした絵画の存在は何を示しているのであろうか。富士見塚1号墳の

円筒埴輪には、斜格子文や綾杉文を胴部に施すものが複数見られる。類似の文様をもつ円筒埴輪は埼玉1号山古墳にも存在することから(注1)、当該地域との関連をうかがわれる。ただし、円筒形象埴輪の作風や鹿、文様の描き方は両古墳で全く異なることから、工人の移動ではなく埴輪製作の際の儀礼・習俗といったソフト面のレベルにとどまる伝播であったとみられる。

関東地方の埴輪の鹿の絵画例は5世紀半ばまでさかのぼる。府中愛宕山古墳は須恵質の埴輪片の存在から甕窯導入後の時期と考えられ、新しい技術とともに動物を描く習俗がもたらされたとすれば、こうした埴輪の絵画は、5世紀後半の時期のなかで高浜入り周辺に複数回にわたって埴輪製作の影響の波が到達していた証であると言えるだろう。本稿をなすにあたり、資料の実見・写真の提供について石岡市教育委員会ならびに谷仲俊雄氏にご高配を賜った。記して感謝申し上げます。

注1 富士見塚1号墳の綾杉文は有軸であるのに対し、1号山古墳例は無軸である点で違いがある。

主要参考・引用文献  
小泉玲子2013『埴輪の動物線刻について』昭和女子大学文化史研究 第16号 昭和女子大学文化史学会  
／国士館大学考古学研究室編2006『富士見塚古墳群』茨城県かすみがうら市教育委員会／ナツヒ矢麻編2023『特別史跡埼玉古墳群一子山古墳発掘調査報告書』埼玉県教育委員会／春成秀爾1999『埴輪の絵』国立歴史民俗博物館研究報告 第80集 国立歴史民俗博物館／諸星政得ほか編1980『府中愛宕山古墳周濠発掘調査報告』石岡市教育委員会／谷仲俊雄編2016『市内遺跡調査報告書』第11集 石岡市教育委員会／谷仲俊雄2020『舟塚山古墳と常陸南部の中期古墳』古代文化 第72巻第2号 古代学協会／山中章編1986『向日市埋蔵文化財調査報告書』第18集 向日市教育委員会

# 伝宮崎県百塚原出土環頭大刀と 装飾付大刀の変容

竹内 理来

**古** 墳時代の大刀のなかには柄頭に多様な装飾を持つもの、柄や鞘が金色に光り輝くものが存在する。外装に装飾を持つこれらの大刀を「装飾付大刀」という。今回は、当館の収蔵品を通して装飾付大刀の変容について紹介する。

写真1、2は当館所蔵の伝宮崎県百塚原出土環頭大刀の柄頭（A-84）と鞘（A-134）である。これらは別個体であり、購入時期も異なっていることから「古墳の出土ではないと思われる。環頭大刀は装飾付大刀の一種で、植物や想像上の動物が表現された環状の飾り（環頭）を柄頭に持つ。大陸や朝鮮半島に起源を持つ大刀であり、日本列島には古墳時代中期後半、主に朝鮮半島から本格的に流入した。6世紀には列島内でも生産が始まり、意匠を変えながら7世紀半ばまで作られる。



写真1 伝宮崎県百塚原出土 単鳳環頭(部分)

A-84の環状部は縦4cm、横6cmで、鍍金が一部残っている。環には龍文と呼ばれる文様の内部には1体の鳳凰がデザインされており、こうした環頭は単鳳環頭と呼ばれる。本例は龍文と鳳凰の表現の退化具合から、環頭大刀の国産化から更に時代が下ったものと考えられる。



写真2 伝宮崎県百塚原出土 環頭大刀の鞘

この種の環頭は国産化開始時に盛んに作られたが、6世紀末ごろには2体の龍を表現した双龍環頭に取って代わられた。

A-134の鞘は鞘口から鞘尻（先端を欠く）が残存し、長さ71cm、最大幅3.5cmである。全体が金銅製の板で覆われ、一部木質が残る。装飾付大刀は6世紀後半〜末に最盛期を迎え、多種多様な外装を持つ大刀が生産された。ところが、6世紀末から7世紀にかけて装飾付大刀の装具は齊一化される。本例には周囲に列点をめぐらせた2列の円形浮文が刻まれた飾板が取り付けられているが、この形式は装具の齊一化以降に生産された大刀に多く見られる。また、古段階の環頭大刀の鞘尻は平坦で、先端に蟹目釘という部品が付く場合が多いことから、従来は杖のように立てて持ったのだと考えられるが、本例は2つの足金物を持つため、後出する腰に吊るすスタイルであったことが分かる。

環頭大刀を含め、装飾付大刀は軍事権やヤマト王権における社会的地位などの象徴として機能していたとみ

られている。古墳時代後期に栄えた装飾付大刀だが、7世紀の半ばには生産が絶え、装飾性の低い方頭大刀へ置き換わる。これは装飾付大刀の生産を主導していた氏族の滅亡や、冠位十二階をはじめとした新たな冠位・位階制度の制定により国内における身分を大刀で示す時代が終わったことなどが理由と考えられている。

今回紹介した環頭大刀をはじめ、装飾付大刀はそれぞれに煌びやかな外装を持つ。これらの外装はただその豪華さで目を楽しませるだけでなく、古墳時代の社会構造や時代背景などを我々に教えてくれるものなのである。

- 注 ※1 鞘のほか、柄元・柄間・鏑・鍔も残存しており、常設展示室で展示している。  
 ※2 2列半球形打ち出し文。  
 ※3 大刀を杖のように立てた際に鞘尻を保護するための部品。  
 ※4 大刀を腰に吊るすための紐を通す金具。  
 ※5 柄頭の側面観が四角形を呈する大刀。

- ・大阪府立近つ飛鳥博物館編1996 『平成8年度秋季特別展 金の大刀と銀の大刀—古墳・飛鳥の貴人と階層—』大阪府立近つ飛鳥博物館  
 ・木更津市郷土博物館金のすず2021 『金鈴塚古墳出土品ガイドブック 煌めく金鈴塚』木更津市郷土博物館金のすず  
 ・古代歴史文化協議会編2022 『刀剣—武器から読み解く古代社会—』ハーベスト出版  
 ・島根県教育庁古代文化センターほか編集2005 『島根県古代文化センター調査研究報告書31 装飾付大刀と後期古墳—出雲・上野・東海地域の比較研究』島根県教育庁古代文化センターほか

〈参考文献〉

## 小鹿田焼大皿

大分県 1989年収集

戸部 瑛理

### 来歴

**大** 分県日田市の小鹿田皿山地区では、現在も9軒の窯元が小鹿田焼の生産を続ける。小鹿田焼は1705年に福岡県小石原焼の陶工が小鹿田窯を開いたとの伝承が残存するが、小石原焼は文禄・慶長の役の結果、朝鮮から移入された技術を引き継ぐ高取焼を礎に発展した。そのため、来歴を遡ると朝鮮半島由来の陶法に帰着する。

昭和初期に民藝運動を牽引した柳宗悦は『日田の皿山』（1931）を著し、1927年の小鹿田焼の里行きのエピソードを、朝鮮由来の生産方法を継承していることに対する驚きとともに詳述している。彼や民藝運動は大きな影響力を持ち、小鹿田焼が1970年に国から「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」に選択される流れを生み出した。また、1995年には重要無形文化財に指定されている。



① 飛び鉋

### 装飾技法

**当** 館は小鹿田焼の大皿①と②を収蔵している。①は細かな線のような模様が並ぶ「飛び鉋」、②は放射線状に濃淡が浮き上がる「打ち刷毛目」が目立つが、いずれも蹴轆轡の回転を利用する連続模様で、素地に化粧土と呼ばれる白土を塗布してから施す。これらの装飾技法は、小鹿田焼「らしさ」を表す象徴といえるだろう。

飛び鉋は大正末期に開発され、技法としてやや新しい。蹴轆轡を蹴り回転させながら、陶工オリジナルの薄い鉋を素地の表面で上下させ模様をつける。①の飛び鉋は、化粧土がたっぷり塗られた皿に渦状に刻まれている。打ち刷毛目は化粧土が固まらないうちに、表具用の幅広の刷毛を轆轡の回転方向に合わせて押し当て模様を打つ。焼成とともに、刷毛目は化粧土と素地の濃淡によるグラデーションへと変化する。②は放射線状に刷毛目が並び、花びらを思わせる優雅な文様として皿を彩っている。



② 打ち刷毛目

### 唐白

**小** 鹿田焼の独自性は、水車を用いた原土の粉碎装置—鹿威しに似た小屋型の「唐臼」にあるとも言っても過言ではない。唐臼のシーソーの片側にある水舟に水が溜まると反対側にある杵が跳ね上がり、水がこぼれると杵が土の入った臼に振り下るされる。粉碎した土を水簸し、沈んだ砂粒と浮いた塵を除いた部分を引き上げ、乾燥させると陶土が完成する。全国の多くの窯元が陶土の精製工程に機械を導入するなか、小鹿田の窯元は字義通り手間をかけて土をつくり続けている。

■工芸技術記録映画「小鹿田焼」  
 (文化遺産オンライン)  
 打ち刷毛目(4分48秒ごろ)  
 飛び鉋(5分36秒ごろ)



- ・大分市歴史資料館編1990 『大分のやきもの』大分市歴史資料館  
 ・長田明彦、中川千年、貞包博幸監修1998 『小鹿田焼—すやかな民陶の美』芸艸堂  
 ・美和弥之助文、船木顕司写真1975 『カラー日本のやきもの5 上野 小石原 高取 小鹿田』淡交社  
 ・柳宗悦1931 『日田の皿山』青空文庫、[https://www.aozora.gr.jp/cards/001520/files/56748\\_66533.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/001520/files/56748_66533.html)(最終アクセス:2024年1月19日)

〈主要参考文献〉

# M2 カタログ

## 新商品、続々登場!



サイズはS・M・L・  
XL・XXL の5種類!

こっそり古墳アピールができる  
玉里舟塚古墳Tシャツ



¥1,300 (税込)

※写真はイメージです



何が出るかお楽しみ  
アクリルスタンド(ランダム全4種)

¥500 (税込)

### ミュージアムショップ開室時間

月~金 10:00~16:30 土 10:00~12:30  
※日曜日・祝日・大学が定める休日および夏季・冬季休業日は閉室  
※販売品・価格は変更する場合があります

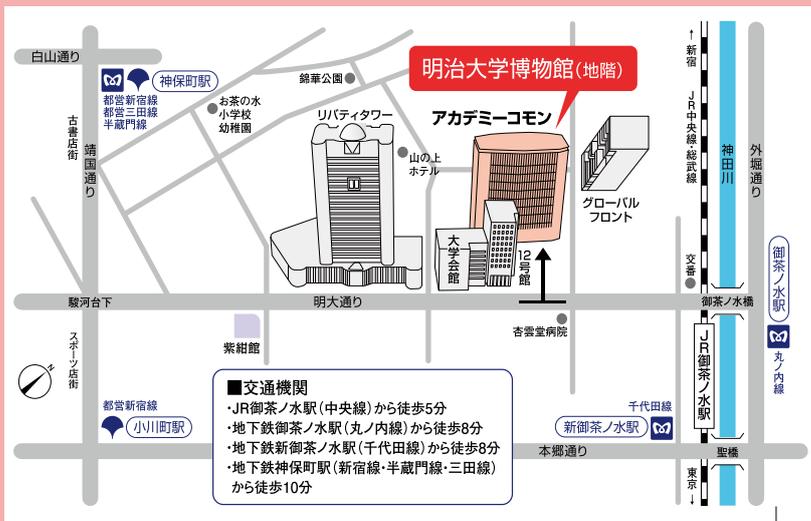
### 来館案内

#### 展示室ご利用案内

- ◆ 開館時間  
平日 10:00 ~ 17:00 (入館は16:30まで)  
土曜 10:00 ~ 16:00 (入館は15:30まで)
- ◆ 休館日  
日曜・祝日・8月1日~9月19日の土曜  
夏季休業(2024年8月10日~16日)  
冬季休業(2024年12月25日~2025年1月7日)  
大学の定める祝日(11月1日・1月17日)
- ◆ 観覧料 無料

#### 図書室ご利用案内

- 図書室はどなたでもご利用いただけます。
- ご利用は蔵書の閲覧・コピーのみとなります。
- ◆ 開室時間  
平日 10:00 ~ 16:30  
土曜 10:00 ~ 16:00



おうちミュージアム!

MUSEUM EYES

ミュージアム・アイズ 2024年 Vol.82

明治大学博物館 MUSEUM EYES (ミュージアム・アイズ)第82号

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1 アカデミーコモン地階

【TEL】03-3296-4448 【HP】<https://www.meiji.ac.jp/museum/>

2024年3月22日発行 【印刷】株式会社サンヨー 【第82号製作スタッフ】忽那敬三・南雲茜・矢口結菜